

第一部
古代・中世

概 要

第一部で取り扱うのは、キリスト教の古代から中世にかけて活躍した教父、スコラ神学者による主要命題とその著作となる。いずれもキリスト教思想史において基本的なもので、その骨格を形成するものばかりとなる。

教父とは古代のキリスト教会を形成した「教会の父」の意味で、便宜上、著作をした言語によって分類される。ギリシア語で書いた教父はギリシア教父、ラテン語を使った者はラテン教父、他にはシリア語で書いたバルダイサン、ニシビスのエフライムといったシリア教父などもある。古代の教会において「聖書」と言えば専ら「七十人訳聖書」（ギリシア語訳聖書）であったことから分かるように、もともとはギリシア語が用いられていたのであって、使徒教父、弁証家など、おおよそ3世紀までの教父の文書はすべてギリシア語で著されている。最初のラテン教父が確認されるのは、ようやく2世紀末ごろ、北アフリカのカルタゴで活躍したテルトゥリアヌスを待たねばならない。以降キプリアヌス、ラクタンティウスなどラテン語で書いた教父も登場するのであって、4世紀から5世紀にかけて活躍したヒッポのアウグスティヌスはラテン教父の代表的存在とみなされる。

第一部では、まず8章まで代表的な教父を取り上げて神学的に重要な命題が論じられる。キリスト教の古代を生きた教父たちの努力によって形成されたキリスト教の神論は、まずはロゴス・キリスト論、そして三位一体論やキリスト論へと発展するが、第1章と第3章はその基本命題を扱う。イエス・キリストを神のロゴス、御言葉として捉えるユスティノス（第1章）、そして父、御子、聖霊の三位一体論、さらに後にイエス・キリストにおける神性と人性の関係を論ずるキリスト論の基盤となる思想を明らかにしたアタナシオスを取り上げられる（第3章）。そして聖書を通して神を知り、神を認識することに関しては神的感覚論（第2章）、否定神学（第4章）、自己内省を通した神探求と神認識（第5章）の三つのテーマが論じられる。西方のアウグスティヌスを巻き込んだドナトゥス派論争は、聖礼典（秘跡）と教会論が争点となったが、ここではとくに教会論に焦点をあてた命題が取り上げられる（第6章）、またペラギウス主義論争では自由意志と恩恵論が主題となっていた（第8章）。そして歴史理解と社会に関わる問題を扱ったアウグスティヌスの『神の国』については、その基本思想が第7章で扱われている。

中世キリスト教の神学とは中世ヨーロッパのキリスト教思想であり、西ローマ帝国滅亡後、数百年の醸成期間を経て開花していく。カロリング・ルネサンス期の思想家やエリウゲナなども重要ではあるのだが、10世紀あたりから神学的営みも本格化していったといえる。それらはスコラ学と一括りにされる傾向も見られたが、イスラムの影響関係も多様で、実は中世という時代は多彩で多産な神学思想に満ちており、その豊かさはますます明らかになってきている。

カンタベリーのアンセルムスは10世紀に活躍した初期のスコラ学者であり、その贖罪論も著名ではあるが、ここではそのユニークな神の存在論証を取り上げた。彼の考案した論証は、哲学を含め後代に大きな影響を与えたのであった（第9章）。クレルヴォーのベルナルドゥスといえばシトー会の代表的な神秘家の神学者であるが、雅歌を通した愛の神学を深化させた。ここでは徳論に「味覚体験」としての知恵という要素を加えた命題が選ばれている（第10章）。さらに信仰と理性、恩寵と自然、これらはスコラ神学者たちにとって大問題であったが、これを一つの定式へとまとめたのが13世紀の神学者トマス・アキナスであった。その恩寵と自然について有名な基本命題が取り上げられる（第11章）。古代・中世の聖書解釈論は近代から現代に続く聖書のテキスト解釈とは大きく異なるが、トマス・アキナスは古代・中世の聖書解釈を独自の視点から統合し、意味の多様性ではなく、重層性としてまとめて論じている（第12章）。さらにドイツ神秘主義の祖マイスター・エックハルトは、トマス・アキナスと同様、パリ大学の教授を二度も務めた当代随一の思想家であったが、その『ヨハネ福音書註解』では大胆な統合の神学が構想されている（第13章）。そしてウィリアム・オッカムの神の全能性の議論は、彼一流の透徹した論理によってこの問題に切り込んだものであった（第14章）。ウィリアム・オッカムは中世後期を生きたのであって、時代はもう少しでルネサンスと宗教改革へと展開していき、キリスト教思想もさらに新しい局面を迎えることになる。

【土井健司】

1 ロゴス・キリスト論

(ユスティノス『第一弁明』『第二弁明』)

命題

こういうわけで私どもの教えは、確かにあらゆる人間的な教説よりも偉大であると思います。その理由は、全体者なるロゴスが、私どものために出現したキリストとして生まれ、身体とロゴスと魂とになったからです。

ユスティノス『第二弁明』第10章1節

はじめに

キリスト教思想史のなかでロゴス・キリスト論はそのはじめに取り上げるべき根本思想のひとつである。ロゴス・キリスト論とは、ローマ帝国の辺境の地に活躍したナザレのイエスが、世界を創造し統べる神のロゴスそのものである、という思想になる。なお「ロゴス」というギリシア語は日本語に移しにくく、一般に物事の「^{ことわり}理」、その理を捉える「理性」、そして理性によって捉えられたものを外へと表現する「言葉」の三つの相を統合した概念であることを理解しておかねばならない。これら三つに相当する適当な言葉が見当たらないので、通常「ロゴス」と表記される。すでにヨハネ福音書冒頭にロゴス賛歌があって、神のロゴスははじめに神とともにあるが、このロゴスが世に現われてナザレのイエスとして歴史において活動していった、という。ただしヨハネ福音書とは異なり、ロゴス・キリスト論においては、ロゴス概念が中心的なものとなるのであって、イエスの歴史性以上にロゴスが強調されるところに特徴がある。そのためかつてアドルフ・フォン・ハルナックは、ロゴス・キリスト論を嚆矢として「福音のギリシア化」がはじまると考えた。ハルナックにとって「ロゴス」はギリシア哲学、とくにストア派の概念でしかなかった。しかし今日ではロゴス論の聖書的背景などが指摘され、哲学的背景だけではないことが明らかになっている。

生涯

この命題を述べたユスティノスはフラビア・ネアポリス出身というが、旧約のシケム、現在のナーブルスにあたる。生年は不明であるものの、おおよそ 100 年頃と推定される。バル・コクバの乱の後になされた対話をもとに書かれた『ユダヤ人トリュフォンとの対話』の冒頭（第 9 章まで）に若干の自伝的記述がある。これによると青年期に真理を求めてストア派、ペリパトス派、ピュタゴラス派をめぐる哲学を学んだが、最後にプラトン主義を学び、非質料的なアイデアの観想を楽しむようになったという。そのようなとき、ある老人と海岸で出会う。対話をとおしてプラトン主義の限界を認め、老人の告げた預言者とキリストを信じ、彼は真理認識の確信を得たという。のちにローマに赴き、キリスト教の私塾を開いたが、そこではつねに「哲学者の衣」をまとって授業をしたという。彼は 155 年頃に皇帝アントニヌス・ピウスと後継者のマルクス・アウレリウスに宛てた『第一弁明』を執筆し、また元老院に宛てて『第二弁明』を著した。これに『対話』を加えた三書は著作として残存するが、それ以外の著作は題のみが伝わり、内容は失われてしまった。その最期は、哲学者クレスケンスの告訴によって逮捕され、「キリスト者」として処刑されたという。165 年頃のことと伝わる。

背景

ログス・キリスト論は使徒教父文書には見られず、2 世紀の弁証家の著作に出てくる。とりわけ殉教者となったローマのユスティノスの二つの『弁明』が重要なものとなる。「弁明（アポロギア）」は 2 世紀に見られるキリスト教著作のひとつの文学類型であって、「弁証家」と呼ばれる人びとが書いたものである。弁証家とは広義には「とくに外部に対する自分たちの信仰の理性的な弁護と推奨を行う仕事にはじめて従事した（120 年頃から 220 年頃の）キリスト教著作家に与えられた名称」であり、アリストイデス、またアテナゴラスやテオフィロス、ミヌキウス・フェリクスといった人びとのことをいう。しかし狭義には「弁明」を書いた人びとのことを指す。この場合「弁明」とは皇帝や元老院に宛てて書かれた請願書（リベルス）であって、社会における非ログスのな、つまり理不尽なキリスト教迫害の嵐が吹きすさぶなか正当な裁判を求め、キリスト教を弁護しようとした。

そもそもは 2 世紀の初めにトラヤヌス帝の定めたキリスト者の扱い方に遡

る。さまざまな条件を付けつつも皇帝は、キリスト者をその名のゆえに処罰するよう指示した。以来キリスト者は「キリスト者（クリスティアノイ）である」と信仰告白することだけで処刑されることになっていく。何か悪しきことを行ったわけでもなく、ただその名を認めただけで処刑されるという理不尽さに抗して著されたのが「弁明」という文書なのである。

ところでユスティノスのロゴス概念には「種子的ロゴス（ロゴス・スペルマティコス）」などストア派の影響も見られるが、ロゴス・キリスト論となるとその思想的背景として三つのことが挙げられる。まず（1）先述したヨハネ福音書のロゴス賛歌である。そして（2）箴言（8章22節以下）等に見られる「知恵」の思想である。「知恵」は創造に先立って造られ、世界創造において神の働きを助けたという。さらに（3）アレキサンドリアのユダヤ教哲学者フィロンのロゴス論が挙げられる。超越する神そのものとは別に世界に働きかけるロゴスを論じていた。ただしフィロンの場合は神から独立した存在としてロゴスは捉えられておらず、神に内在的な力と理解されるにとどまる。

解題

ユスティノスにとってキリスト教迫害は理不尽そのものであった。悪しき不法行為のためでなく、ただ「キリスト者」という名を認めるだけで処刑されるからである。『第二弁明』の冒頭は実際に起こったその告発と裁判の様子が描かれており、その裁判の場において理不尽さを糾弾しようとしたキリスト者も却って処刑されてしまったという。ユスティノスにとってこのような理不尽がまかり通るのは、権力者が悪霊に惑わされ、駆り立てられているからだという。なぜ悪霊なのか。それは異教の宗教の神々のことを指しつつも、そもそもは正しい者が理不尽な仕方では悪を被るのだから、それは人間を超えた悪霊の仕業だという。迫害という巨悪を前にしたとき、人は人間離れした存在のリアリティを感得するのであろう。ユスティノスは次のように記している。

にもかかわらずあなたがたは、審理によって取り調べるのではなく、理不尽な感情と悪霊どもの咎に追い立てられて、省みることなく、審理なしに罰を課していらっしゃるのです。（『第一弁明』第5章1節）

そこで、理不尽な迫害を前にユスティノスは知恵を尽くして請願書を書き、ログス（物事の理）に則った裁判を求める。相手は名君の誉れ高いアントニヌス・ピウス帝であり、また哲学者と呼ばれる後継者マルクス・アウレリウスである。そこでユスティノスは哲学者ソクラテスの故事をもちだす。その昔、ソクラテスはログスに従って哲学的対話を行ったがために、青年を惑わした無神論者として告発されて処刑された。いつの世でも悪霊は正しい人、ログスに従って生きる者を迫害し、殺害する。ましてやログスそのものであったキリスト、さらにログス・キリストに倣って生きるキリスト者も同様に迫害を受けることになる。こうしてユスティノスの議論の中心にログス概念が置かれることになる。

それにしても、なぜキリストをログスそのものと捉えるようになったのだろうか。ひとつには、イエス・キリストという存在が歴史的、地理的に限定されているため、たとえばキリスト以前に生まれた人びとにとってキリストのもたらした救済は及ばないのではないかという問題があった。これは『第一弁明』第46章の議論である。そこでユスティノスはログス・キリスト論を展開する。キリスト以前に生きた人であっても、そもそもキリストはログスそのものであり、人間はすべていつの時代でも何かしらログス（理性）に関わって生きているはずだから、キリストに関わって生きていたのである、と。ここから有名な「ソクラテスもキリスト者である」という思想が出てくる。つまり「ログスに従って生きた」人は誰であれ、まさにそのためにキリスト者であると言われる。

こうして歴史と空間を超越して、ログスそのものであるキリストの働きが肯定される。ログスに従って生きることこそがキリスト者の証であり、またこの世ではそのため悪霊によって迫害を受けることになる、これがユスティノスの基本思想となる。悪霊による迫害という点は、研究史において比較的新しく注目されるようになったもので、そのためユスティノスのログス・キリスト論に対するユダヤ教黙示思想の影響が指摘される。なおログスに従って生き、迫害を受けたキリスト以前の「キリスト者」としてユスティノスが挙げるのは、ソクラテスの他、ヘラクレイトス、アブラハム、ハナンヤとアザルヤとミシャエル（ダニエル書1章6節、3章13節以下）、そしてエリヤである（『第一弁明』第46章）。

それにしても、どうして哲学者ユスティノスはそこまでキリストを信じるようになったのか、その根本には何があったのか。おそらく『第二弁明』第12章1節に次のように記されているのが手掛かりとなろう。

プラトンの教えを喜びとしていた頃のことですが、キリスト者が中傷されるのを聞き、しかしながら彼らが死をも恐れず、世間で恐ろしいと考えられているどんなことにも臆せずにいる様子を見た時、こういう人びとが悪徳や好色の生活を送るはずがないということを理解し始めたのです。……殺されるために自身の立場を公言するなどというのは、遠くかけ離れた態度だったのではないのでしょうか。

死の克服、これは当時の哲学の主要関心事であった。並み居る哲学諸派を遍歴したのち、死の問題の克服という観点から彼はキリストを信じる、つまり納得するところがあったのであろう。また冒頭の引用文に続く、第10章の結論部分で次のように言われる。

ソクラテスを信じて、この人の教えのために死に至ったほどの者はおりません。これに比すれば、ソクラテスも部分的には知っていたキリストの場合、哲学者や学者ばかりか、手職人やまったく教養のない人びとまでもこのかたを信じ、榮譽も恐怖も死も取るに足らずとしたのです。要するにこのかたは、言葉で言い表すことのできない御父の力であって、人間的制約を負ったロゴス（理性）の産物などではないのです。

（第10章8節）

ロゴスそのものであるため、人をして死を克服させるだけの力がキリストにはある。ソクラテスはロゴスに殉じ、他の哲学者もロゴスを求めて探求する限り、部分的にはキリストに与っている。キリストはロゴスそのものとしてそのすべてを照らし、導いているのであって、これを自覚してイエスに帰依するのがキリスト者ということになる。

ロゴス・キリスト論はイエスの神性の概念を発展させ、三位一体論の議論へとつながる。4世紀になると神学の主要主題はロゴス・キリスト論から三位一体論へと移行していく。それでもロゴス・キリスト論はそれらの根底に

脈々と流れている。さらに中世神学、現代神学においても神のロゴス、「御言葉」は基本概念となっていることが確認できるのである。

文献

A. Wartelle, *Saint Justin: Apologies. Introduction, Texte Critique, Traduction, Commentaire et Index*, Paris: Études Augustiniennes, 1987.

『キリスト教教父著作集 1 ユスティノス 第一弁明、第二弁明、ユダヤ人トリュフォンとの対話（序論）』柴田有、三小田敏雄訳、教文館、1992 年。

柴田有『教父ユスティノス——キリスト教哲学の源流』勁草書房、2006 年。

【土井健司】